以て聖教をうつせる紙匂ひの聖教といふて当寺にあり淳祐の縁擧知る人なかりし只此記の中に履一ツを挿せしなりなり片履の圖といふ然し匂ひの聖教とは例の僧の妄説なるべし

○龍穴の池 本堂の西南にあり旱のときは此池に雨をこへばかならずしるしありとぞ

○曆海尻掛石 龍穴の池の東にあり昔曆海和尚といふ人此石の上に座して讀經せし故に其名ありといふ

○弘法大師剃髪の名号○式部自筆の大般若并硯石○淳祐匂ひの聖教 皆寺宝といへども故の述もなし

新古今
都にも人や待らん石山の峯にのこれる秋の夜の月　長能

霧の女とみえぬはかけてもけふの石山ふかき寺をこそ思へ　藤原公條

○桜谷の瀧 勢田川旱水の時は必康兄のおくく漲る昔よりサクナタリと號て宮に桜戸の社今はみな是天智の朝に百官の後愛之即康兄の上の山を岩屋山と經をなして其内山の下にて今山伏の行場ともなれるは古の遺風也○ 拾玉集慈鎮の哥に

落てくるや桜谷よりおちたきつ川浪も花さく宇治の網代木

○むかしは宇治川も湖水の末にして勢田田上桜谷をめぐりて宇治に入と

○悪源太義平が塚 本堂の西山中にあり 義平ハ源義朝の嫡男にて十三歳にて鎌倉より十九歳にて都へ上り平治の戦ひに異なるおもひ出もなく父の討れける父の仇と窺ひ六波羅に忍び窺ふに終に石山寺にて生捕られ六条河原にて難波三郎に首を切らるる時年廿二歳其後清盛布引の瀧見物し出しまゐる時義平の霊雷となりて難波三郎を蹴殺しけると云

紫女七論標題云

才徳兼備
式部が才を賞し又物語の本意の賞徳あることハ其比類なきことを論を

七事共具
又みちたる名の学者なる二つハ幼にして聡明三つハ音楽ニ妙なりし四つハ歌よミなり五つハ眼の肥たる五つハ時代中業を能く文章ニ達する六つハ諸国の名區を経歴を七つハまさる鄙のならひ通じ

修撰年序
式部がうつし加筆御作本ありしとの説につきて他の物語を引て年紀をあらそひし紫女の一作なりしを論を

文章無雙
他の物語の形をまねうる国情風景官家田家貪富国窮衰傷なく委しく後へくえるもの徳なるべし

作者本意
もつぱら人情世態をのべ諷諭して勧善懲悪の意を論を

一部大事
冷泉院の御事ニ付て異説あることを論を

正傳説誤
この物語の治捨遺ハ物が作をこまかなるをうることもをむかしとあまりてせられことの多きつきてさらぬ建撰ともをあげて論を

紫式部石山に籠て源氏物語五十余帖あらハし今本堂の中に源氏の間といふあり式部硯の

硯又画像あり土佐光起の筆之今其趣を摸して
これ図と讃詞を近江
蔵経基の清筆之
題龍樹四門
有門空門亦空門
非有非空門
式部詠二首
ゆくたいらぬる身にの
叶ふらん
忘れぬも わをひ
しらまほ
後の世になりかへて
うんかれらえし
あまはきてをぬ
かみあれとも

石山寺（いしやまでら）
月亭
頼朝建立塔
ヨリトモ塚
カメガヤツ塚
紫式部塚
鐘楼
祖師堂
八重桜
毘沙門堂
札堂
食堂
蓮花池

悪源太塚
尻掛石
本堂
宝倉
三十八社
天狗松
拝殿
アカ井

石山寺門前

石山寺草創地
基平均時五尺ノ
寶鐸ヲ獲タリ土中ニ

とぞ出へきとかり　後に罪障懺悔のために般若一部六百巻を
みづから書て奉納しける今に彼寺にありと云

或書云源氏物語ハ児女子の口にも唱ふるものなれども学ばざればやすくハいろはず
がたし文筆他の物にあらざれバ其才にいひくらべ和漢女の身にして是が右に出る
ものなし儒学史漢の旨趣此物がたりにこもる事あげて云がたし其外仏書を
天台一心三観の血脈をつゞらば日本紀をよく見てこそ見らるれとて日本紀の局とも云
けりまた石山にて経巻の裏に須磨あかしのまきより書はじめけるとハ式部が心
のうちに成る説後の人のみにあり侍りなんと独笑せられ侍るまで桐壺より次第に書
下しけると見るべしまた河海の説を信し彼自筆の大般若はなかく
てぞ石山にまうでける坊に逗留して其わすれを見侍りしがやゝくも宜云ふらく
侍りき　後世代々にわたりて源氏の抄を著せし其書数大かた卅品斗
と云云
其中にも伊行卿の奥入を始め定家退注加中院の氓江入楚にて其全き説得らる

○紫式部石塔　紫式部ハ閑院左大臣冬嗣公の末裔越後守為時が
女之始鷹司殿後二位倫子の侍女より中宮左京り撰佐宣孝に嫁して長保三
年に宣孝におくれて寡となり其後上東門院に宮仕しまたり一方式部とそ云
のちと成生の年月旧記に見えず卒去の年記詳ならねど紫式部始めハ藤式部
といひけり又系図に御堂関白道長公の妾としるしたる妾説之尚日記の文を見ても知べし

○源頼朝公石塔○同乳人石塔ハ相伝ふ源頼朝公の乳母亀谷谷女といふ人の墓なり
とつてより由緒たてまつりしゆゑまびらかならねど

○片履の図　本堂より乾のかたにいふ
○普賢院の内供淳祐が師ハ醍醐の観賢僧正之淳祐が弟の
後延喜の帝のみことのりによりて淳祐をうけて高野山に参り
大師の御廟の御前にてしばらく剃髪をとなへ大師の御衣の香ひ淳祐の手にとゞまり其手を

櫻谷螢

此ハ勢田の橋
東ハ供御が瀬
まで凡二十五町
が其間よ群り
飛ぶ事千萬なり
あたかも衆星の光よまがふ
それ又取旅するてる
少人飛水上人家の
軒までもいり入り
向暑のころ芒種
の後五日より夏至
の後五日よりつぐまで
凡十五日の間殊盛り
なりとす夏至を過
ぎて小暑の節になれば
漸く川辺へとぶのみ治まし
のち螢と云 世よこれを
蛍合戦と云

冨士谷成章

へ出しられしと文中に歌の心を構とつゞきたる事あるまじ定家卿の家あり

きれ後の歌乃うらなえしとぞ立て置しまうろく様雲の会

とよく給へるも只歌のみ也○按るに紀のしはうきえしとのくはひなる源語の縁

ある地なれば好事の人歌よみふ源氏によひたるやあらん其説は

玉葉集に永融院石山にまうてまする時九月廿日廣上人もうき橋と云ふ事へまうて給ふ

給ひけるに

秋しても帰るあふにはいふものゝねる秋のみかのとらん　公任

▲石光山石山寺（せきくわうざんいしやまでら）　勢田の東二丁　如意輪観音順礼十三番札所　開基は良辨僧正

正天平勝宝元年草創　元亨釈書曰　聖武天皇東大寺を創造し給ひ十六

丈の盧遮那仏の大銅像を鋳べき叡慮ありて僧正

多くの金なれを給ふり此時未だ我朝には黄金なかりければ帝是をうれひ給ひて僧正

良辨に詔あり和州金峯山の金剛蔵王権現に金の資を祈り求めしむ権現夢中に

告て曰此山の黄金は得させがたし今汝に別方を示すべし江州勢田に一ツの山あり

如意輪観音の自在霊応の地なり彼所に至りて持念せば必黄金を得べし師即

勢田に赴きむかふに大石の上に釣する翁あり良辨何人ぞと問に翁答て我は是山王

比良明神なり此地観音の霊区なりと告終りて再び不見僧正すなはち其石の上に庵を

結びて如意輪観音の像を安置して持念しければ日ならずして奥州より黄金を献ず帝

武帝叡感ましましてまづ石山寺を建立したまふ又其地基をならすとて天平の宝鐸

をほりいだせりここによりて人益霊場なることを尊べり今も本尊の像は大石の上に座したまひ

堂は震ひなるがおほし

此寺に縁起あり名画古貌にして好古人甚是を賞す又人すに益あり

○本堂　如意輪観世音菩薩　御長丈六　座像にして真正菩薩の御作

御胸の間に六寸の小像を納む是聖徳太子の御作脇立は蔵王権現執金剛神おのおの御長八尺本堂は浅井備前守長政の御息女豊臣太閤御側室淀殿の再建

○祖師堂 弘法大師の像 良弁僧正像 内供淳祐像 三高祖を安置す○三十八所明神の小祠岩の上にたてり ○般若十六善神○薬師十二神○法華十羅刹女らを合せ祀る或は伊弉諾伊弉冊磐余彦尊の三神を祭るなりともいふ

○毘沙門堂 元内院なるにて源頼朝建立 ○札堂 如意輪観音 ○舞臺○龍蔵権現 石檀の中途にあり 本地は勝軍地蔵と云 ○閼伽井○鐘楼○寶庫○白髭影向石 坂の下にあり ○多寶塔 本尊大日如来

○源氏間 本堂の内にあり 河海抄に云 西宮左大臣安和二年太宰の権帥に左遷せられ給ひしかば藤式部おさなくより馴れたてまつりて思ひなげく比大斎院より上東門院へめづらかなる草紙やはべると尋させ給ひけるに宇津保竹取やうの古物語はめなれたればあたらしく作り出して奉るべきよし式部に仰られければ石山寺に通夜して此事をいのりけるにをりしも八月十五夜の月湖水にうつりて心のすみわたるまゝに物語の風情そらにうかびけるを忘れぬさきにとて仏前にありける大般若の料紙を本尊に申うけて先須磨明石の両巻を書とゞめけり是によりて須磨の巻にこよひは十五夜なりけり

粟津合戦

今井四郎兼平ハつゐに
破らるゝに及んで敗卒
五十騎を率ひて
義仲にめぐり
あひ能れが
先鋒一条が
四郎と追
ふりを拂ひ
見とも義
仲討れ
ぬるに因て
その欲を
石田為久
に命じて
目これ見
も久東國の
とのげ日本

平家物語

名所

膳所　むかしより日吉山王祭の神供を献ず故に膳所といふ太閤記
古事記に膳世ともかけり古へ此地は粟津名産なり○膳所の城元は東坂本にあり
て信長公明智日向守に是を守らしむ太閤の御代大津に移し京極宰相高
次是を守る其後戸田某此地にうつし築く云々

おもの濱　膳所の古名なり或字名有御膳の濱と書り

拾遺神楽歌
とくらふるおもあらじな近江なるおものゝ濱のたまみつぎは　兼盛

古これは安元年中大嘗會風俗近江の歌によめりのちは御膳のうらを云之

名所

膳所大明神　所祭大梵天　城の大手にあり祭礼三月三日昔よりこれを粟津ケ原と云えいま城中に遷し宮とうつせり今城中に大なる槻を神木とす

粟津原　粟津里粟津　今膳所の城下其旧地にして膳所明神は即其社の神なり
のはらともいふ

後拾遺
あはづ野のすぐろのすゝきつのぐめば冬たちなづむ駒ぞいばゆる　権僧都静円

すぐろのすゝきの事説々あり一説に此地一種の名産とも云へどもさるべきともおぼえねど

兼平寺　当城御菩提所縁心寺の境内にあり石塔道光大居士　兼平と記せり兼平塚も同時に建り

粟津山王祠　さんおうの宮といふ　是を田畠川原の濱にあり本縁未詳一説に田畠某にかげろふ姫と云へる者ありて頼朝の感状などに賜り此地にありし献供膳の事を紙に是よりけんじめしと号ふ今此祠を山王神の御供献屋とするときは是より尚委しくは山王祭りの条下にあり　○かげろふ池　社の前にあり　○兜塚　街道の北田の中にあり其へ

其二

山王祭禮の時供御の料よとて膳所の町にて七日前より一場をかまへ往来の

人よさいせんと乞ふ
世にこれを賭不の猿と云

膳所
矢橋渡舟
膳所大明神
田畠社

平ツカ

義仲の横逆をうけて範頼義経等をおこして攻めしむ義仲遂に宇治勢田に逆へ
戦ひしかども終に利なくして粟津が原に於て流矢にあたりて自害して卒るを是人の
よく知る所なれば大略省きぬるを

○芭蕉塚 并に 祠堂 本像は當時其角去来をはじめ凡四方の
門人是を営む其後天明年中翁八十回の忌を京都の蝶夢
又改建る祠堂の内に人形三十六人を画き各発句を書て堂内に
掛たり 翁は俳諧一家の祖なり俗姓松尾氏名は宗房忠右衛門と称せしが[illegible]
家の嗣子に仕ふ嗣子風月の志ありて季吟に学ぶ忠右衛門も倶て学ぶ寛文六
年四月嗣子死去せり翁其死を悲しミ我世を遁るべき折なりとて家職を擲
子にゆづりて主君の遺髪を首にかけて高野に納め其身もまた是より風雲にまかせて
行衛なく漂泊して名を桃青とつけ一には風羅坊と号し延宝の末東武深川に庵を
結び泊船堂といふ庵上に芭蕉一株を植ゑ是によりて門友共ばせを翁と呼べり

芭蕉野分して盥に雨をきく夜かな

花の雲鐘は上野か浅草か

と眼前の実景をのべしは深川にありての吟なり是より又さまざま旅寝のうち日
を消しつゝ終に浪花にありてそれ葉の床にひの末期たりし

隠れけり[illegible]

と風の吟ありて遷化して正風の師と仰ぎ侍る其後は[illegible]へ侍りけれバ
病一所にかくてありて[illegible]

其年より大津膳所の人のいざなひ給ひて石山の幻住庵に住し光宣心とし
て於ける年あり元来根本寺佛頂和尚に嗣法してひとり開禅の法師と
いはれ須广の夜泊象潟の苫屋とてをちこちの庵にも住つかするし

住つかぬ旅のこゝろやおきこたつ

なといひし行脚の寝覚も十餘年の間杖と笠とはなれざるに奥の細道の記あり
其後伊賀の故郷に庵をかまへ三ヶ月の記ありさて浪花に来りて程なく病に
ふし門人あまり薬をへだてゝ命運をよわきの宗へ入れ

旅に病んで夢は枯野をかけまはる

いよいよ重きやまひとなりぬれば其角去来をはじめとして其席に侍る去甚
歎かし終に浪花御堂の前花屋の裏といへる偶居に寂を公翁の遺命なりとて
木曾殿と並べ葬んとて亡骸を櫃に入れ其角をはじめて十人のいざなひにて義仲寺に送る
京大坂膳所の連衆まつはりつどふに馳集る者三百余人とたゝん塚にあつまるよ

木曾殿と脊中合せの寒さかな

右は晋子の枯尾花につらねしをそこはかに採とりて其大むねを記し侍る又翁の
風雅は六十余州に瀰漫し門人もまた二万人といへり其の翁にも又一草庵あり初幻住庵
をうつして好人の遊覧とし今諸国に営む芭蕉塚の数二百余基に及べり

この川 ○馬場村 ○別保 国分寺なる 薬師如来 ○膳所惣門

天満宮 此傍に北年前以来東武醫官吉田桃源院法印常
燈籠を構ふ

八大龍王社 膳所の城下なる本にあり去俗 八の宮といふ祭礼九月朔日 ○八大龍神社

義仲寺（ぎちうじ）
芭蕉堂
よし仲塔

石場

旅より帰る人を迎へて宴を催すを今酒迎といへども是れ古へよりある坂まで出て迎へるなれば坂むかひといふべしとぞ
又云日本紀ニ神功皇后紀ニ挙テ觴ヲ以寿二下太子一云云
按るにホカヒを祝ひて酒祝せされば坂宅を悦ぶの宴にもまば酒祝の略ど ならんかるべし

蹴鞠精神

著聞集

侍従大納言成道の卿は
蹴鞠の道に心ざし深く
古今の妙手にてぞおはし
ましける或夜棚に置
不の鞠並にまろび落
来りぬとおもふ程に数は
人にて手足身は猿に
にて三四才の小児など
なる者三人あつまり
鞠の名をなのるといへれ
けるあり何者ぞ
と問給ひければ
我は鞠の精なり
昔よりかほど
に鞠を好せ
給ふ人はござ
りませず

やべきにありて
結りそうとく
眉にかゝれる
髪をおしあげ
見れば一人が額に
春陽花
の字あり
又一人は
夏安林又一人は
秋園の字みえける
延喜の君御鞠好ませ
給ふ代は国栄へ官増し
命ながく福あらん御鞠
の時はめでたく名紙石が
木づたひに参りて宮づく
仕り御守りとなり参らせん
といふ中にも其家は人々など
おもひねされば鞠を受る
ことば彼精が額の精と
呼よくくり

移行年ふり方のむかしが香　竺一検校

其後山科真影堂成就してうつし奉らんとせしに三井寺乃衆徒是を拒んで真影を帰さゞりしかば上人等身の御影を写して新像に成給ふ山科に移されし此後山科焼亡してより新像はなくなりし今京西本願寺の尊影是也（又小関越の山中水車のうへ入り上へ来らんとするも日分術の内なりと云経の名号はを松寺に毎年七月廿四日千体佛とともに披露せらるゝ）

大津里　滋賀郡に町数九十八町人家四千余軒四道の襟喉にして人馬牛車をもて洛中へ運送する事不絶馬をば大津馬とて歌にもよめり又逢坂山越行往ちかふ車のたゆるともなくありつゞけゝりと挙白集にも書けり

新六帖

関こえて着るまではゆる大津馬のあゆみもいつまで急くらん　為家

秋の日もゆふしれぬ山の紅葉は大津の里ぞいさしくなり　隆祐

大津の名は天智天皇の都よりいひそめし也是を御津ともいへり此里は坂本の城此地へ引けしとぞ町数も共に増加しあり町の名も坂本と同名あり

松本社
蹴鞠神社
大津
四宮社
常世神
本社
庚申
本社

天満宮

大津
四の宮祭引山
九月九日十日
西行桜 丸屋町
源氏山 中京町
祈水山 中堀町
西王母 京町
龍門滝 太間町
神楽 堅田町
石橋 鍛冶屋町
猩々 南保町
西の宮 白玉町
湯立 玉屋町
神功皇后 猟師町
殺生石 柳町
月宮殿 上京町
郭巨 後在家町
都合十四番各金玉色漆にて飾り錦繍綾綺の帷幕を張て木偶機関の巧妙を尽しことごとく美麗を尽し緇素群集をなす

邌物行ひ物
造花 堺町 汐汲 末や町
獅々 八幡町 龍光峯入 堤川町
道祖神 鉾 小唐人町
御供 唐子 新町
八月十二日ハ御輿排ひにて其日引山
并百石所より紙
九月七日 山飾
九月十六日 御輿洗

大津八丁
札之辻
千観の馬もせわしやとしの暮
其角

関寺牛仏

栄花物語峯の月の巻に万寿二年五月ごろ
日　此ごろきけば逢坂のあなた関寺といふ
所に牛仏あらはれ給ひてよろづの人々
参り見奉るなり此寺は大なる御
堂を建弥勒を作りすへ奉りけるに
えもいはぬ大木どもも唯此牛一つして
もてひよることかぎりなし　中略　寺のあ
たりに住む人此牛をかりて乗る日は
のらんとてかりける夜の夢に
我はかせふ仏なり此寺の仏
を造り堂を建させんとて年
ごろあるなりとぞある只人はいかゞで
見たうぶるとて見へざりけり　中略
つかふまつるものも多く
ただ此の牛の心ざしにも似ざりけり
かきざらの御房をえたりとて世の中
まかりて参る人参られぬはなき
く　中略　唯帝　東宮宮々ぞ
見たまはしまさで死ぬこの
牛仏そち悩しげにおは
しければ　中略　聖　縁
像を画んとて急ぎ

と蝉丸と字形相似より又相関と相坂関も相似より又延喜の子とまでさせ給ひし説是日蔭之抄にもしるく是むかしの人唐の元帝の故事のあるより日本の事と見あやまりしなるべし蝉児のことは古史考巻三十一にいへらく又按ずるに葉仙翁集の中に蝉丸は山科のあたり紬男の子にして幼年より糸竹を好んで大宮人に立まじりよく流泉啄木の曲をつたへしとぞ後ち家衰へしてわか坂の関のほとりに庵をむすび往来の人のなさけにより露命をつなぎしとあり是やこのは其時の歌といへるはさもあるべし

○按るにいにしへの仮名書は唐の故事又は小説などを摸して作りたる事多し婦女浣に行竹流摂は後漢西南夷傳に三節の大竹を流に沿て其中に一男児あり帰てこれを養ふといへる故事をもとして作りしと見へされば蝉丸の事もさるべきなるらん

関寺

古の関寺は三井寺五別所近松寺の内に近松寺を称す大寺にて坊舎も数多ありしよし古書に見えたり

長安寺

是関寺の跡といふ 此寺は遊行派にて東山法国寺の末寺なり本尊は観世音 但しいふ関寺の本尊は丈六の弥勒にて日本三大仏の一なり初此寺を関寺の古図あり寺内に古の礎ともおぼしき大石などあれどもそのこと当寺に伝へたるなるべし ○小町百歳の木像あり

小野小町年老て関寺の辺に住けりといふ其時の歌

あはれなり我身のはてやあさみどりつひには野べの霞と思へば

又草庵の柱に書たりとぞ

終るまで身をば身こそとおもひなれ行かぬさきなるの人の野送り

或云小町関寺に住しといふ事何の書にも見えざる事也関寺小町といふ謡曲は小町がおとろへて人世の盛衰をさとしめんがために作りたる作者の寓言なるべし

○牛塔 関寺長安寺の前にあり古図に見えたり又重の石塔なれども今は一重残れり 淡海志に此塔を霜相牛塔あるひは迦

葉塔たつくり　慶長の乱に廃して今ハあとのこるなし其塔中より
堀出しつる佛舎利とて近松寺にありとぞ當圖上にあるべし

○關寺ふりハ　或云長安寺の名とあるハ誤りなるべしさやうにてそれとさだむべき不もあるべ
くらにありし堂を牛の塔にてさて栄花物語又更科日記などに考ふるに古
の關ちかくにありし大伽藍なり逢坂より逢坂の西の林藤まての地なるべしこれをいふんと
されバ今西の蝉丸の宮のうしろに廣さ八谷ありこれを弥勒ぶつの安置の像
の旧地とそのかみありけるとぞ其廃地をさぐりて關寺といひつたふべし後世其地へ廣くなむ
まびろひくに小町塚丸など不く多く立たるべしいづれも關寺の地名なりて今のつゞくし
ならしむるならん尚三井寺別所近松寺巻中にん合てあるべし　○淡海志に關寺の跡の
緒あり今其跡の在所にあり關の清水の社地に跡あれども其跡なし

近松御坊　西本願寺掛所　近松顯證寺と號　蓮如上人の御時長禄の法難中より御遺骸の余り
日華門を大谷御坊へ賜ましを山門の衆徒これを始として宗門のかたき
ありしにて大谷を焼拂ふ其時上人新像を薦に包みてのがれ出三
井寺を頼みとし新像と共に近松に入玉ふ此時未だ石を三井寺か
ら附せらる上人それより諸國経歴して又三井寺に帰り給ふ其旧
地なり一説に伯父の御坊萬徳院ともいふ近松寺の住持とのひとぞ
となりありし其時御坊を松本に居給ひけるといふ齢既に六十餘歳明きれば

文明十一年正月朔日
雷かくありけれバ

たつくたまきに立なりかはし　みゆゆる

蓮如

関寺小町
関寺小町の能は猿楽秘中
の秘事なり　其人
あらざれバなきを
より〳〵近世雲
上乱舞會宴
にもなかりし
事なし

はらはく渡御ある其は先驅のゐるとして國々の説教流の者黒き塗笠を被り其は國郡姓名氏記して捧げ行これを説教者の札といふ按るに此説教讃といふは今の讃嘆僧の如き者にて始は經文又は讃を誦るを雑りける文に節をつけし年家〱ろうてず〱錫杖にうけて誦うたりしが中世よりぞ音曲者のごとくなりける其曲節今のやうにて淨瑠璃義太夫ぶしるどの中へもまぜく憂若のあはれを催さしむる曲なり。又祭文ぶしといへるありこれも神佛故人をまつるに其有様ふしてつくりかの祭文ぶしといふも向しりのちなり今三弦にて祭文をうたふは發源は必ず錫杖といふ詞ならびに錫杖をあはらてたるべし

○蝉丸は延喜帝第四の皇子なりとは源の親行東関紀行にもさはいへり然れども其證なきことにて書々にも是を論じて異説多し又今昔物語には宇多法皇の御子敦実親王の雑色としもいへりされば姓氏もみえぬ人なれば此説は信ずべし又今昔物語に博雅三位といふ人木幡とかやの目つぶれたる法師に琵琶はならひたりしと云此盲人に混じて蝉丸も盲人といひ傳へしとはみえたり蝉丸盲人にあらざるなり後撰集にこれやこれ行も帰るもと云歌の詞書にゆきゝの人を見てとよみてはあるべし扨又蝉丸を延喜帝の御子といふは何に付て水戸学士の一説あり是又信じがたし即左に記す

○唐南潮元帝の諱を延基といへり延基の三男蝉の時より瘤ありて其上髪逆にて是を相関といふ不仁棄捨て此子の名を蝉丸といふとるまでば幼年より琵琶を弾ぜりなりふ名付しを今此ならへよりて日本の蝉丸の事と考るに延喜と延基とキの字の音同じ蝉字

蟬丸
後撰集雑一
相坂の関に庵室をつくりて住けるに行かふ人を見て
これやこの行もかへるもわかれつゝしるもしらぬもあふさかの関

牛塔
大津（おほつ）
八丁

長安寺
関寺
関清水
蝉丸宮
せミ丸ノ宮
小町庵
天神いなり
清水

逢坂駒迎(あふさかこまむかへ)

拾遺
あふさかの関の清水にかげ見えて今やひくらん望月の駒　貫之

仝
逢坂のせきの岩かどふみならしやまたち出るきりはらの駒　大山田之遠

公事根源云
今日ハ信濃の勅旨牧の馬奉る六十疋 勅旨の牧延喜式也 式よろえどりて
もとハ八十疋八月にて侍りしかども朱雀

院の御國忌に
あたるによりて十
六日にあたる天皇
南殿に出御なりて左馬
を御覧など上る御馬の解
文國々より貢る馬の選状を奏する
畢て公卿以下次第にたる
をたまはる馬のさし
つなをとりて御前
みをてこゝに一拝す
取のにしれ御馬を引
寮諸侍とて
次ねをりて院
东宮などよる
うべき所々へ
まいる 下略

関大明神
蝉丸宮

牽なまうハこれを逢坂の駒迎といふ　牧とハ天子諸國へ仰せて馬を飼しむるを御牧といふ其國ハ甲斐武藏信濃上野

逢坂のゆふつけ鳥

なり十七日ハ甲斐穗坂廿日武藏小野廿三日信濃望月廿八日上野之尚図上に記す

古今集

あふさかのゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆききをなくなくもみめ　閑院

ゆふつけ鳥とハ世の中さわがしき時に境の祭りとておほやけにせさせ給ふに鶏にゆふをつけ四方の関にいたりて祭る也逢坂ハ東一方の関なればかくよめりと

大和物語

たがみそぎゆふつけ鳥か唐衣たつたの山にをりはへて鳴

龍田ハ大和界の関なりさきにも逢坂をよみたれバ何れも○四方の関ハ東ハ逢坂北ハ有乳南ハ龍田西ハ宍生なり

関大明神蝉丸宮

蝉丸の事ハかつて編をなし此山中の町より八丁の間ハ関清水明神と申に並せ祭る神なり九月廿四日祭廿一日より清水明神へ神輿をうつしまつり廿四日又此社へ還御あり是神なりといづれを御旅所ともまうけざりし

王関観音

此内に蓮如上人の名号石あり庵に慈光院殿の影あり蝉丸の琵琶を安し　これ観音といひつたふ

関清水蝉丸宮

此宮ハ昔の関寺明神にて今ハ三井寺別所の内近松寺中とせり

拜殿の柱に表して云　関清水蝉丸宮ハ醍醐天皇第四ノ皇子日本國中説經讃語勧化師者曲藝ノ者等ノ祖神也　右等之者之免狀當本社ヨリ出之也　○関清水涌出源在ニ本社拜殿之前ニ　○小野小町姿見石在ニ本社ノ左ニ　○小町庵室在ニ本社少北西ニ云云

祭禮の日ハ蝉丸蜀紅錦の御衣ほしく不朽の長刀金装横刀等を

地なれば人もよく志りて古跡も多し。関屋の跡ハ此ほとりにありしとも又大津の市中にありしともいひて未詳。昔の関ハならびに国境に近く先と関戸関津といふ

古今 あふ坂の関しまさしき物ならばあかずわかるゝ君をとゞめよ　離別 よみ人しらず

源氏関屋巻に「関ちのさもうしやまつくあさましかりし道なるとありといふまでは文の言にて此関ちとちいひしも蝉の丸法師をもの関守にたとへていひかへる方なりされどての府も関屋を見るまゝし昔は跡もしるく蝉の常陸より帰る源氏石山詣のみちにてあへるは行きあふ坂の風情なかりけり

名所 関清水 岩清水 今八町の蝉丸の社内にあれども長明無名抄にその府読に水をきよらなりしけんされバ今さびらにそ有しも志らずとさされども八町明神前の町を関寺清水町といへバ此辺りとは見へたり

古今 雑体 君が代にあふ坂山の岩清水こがくれたりと思ひけるかな　忠岑

此歌にてみれば茂りある木陰にある岩間よりわき出する水なるべし

拾遺秋 延喜の御時月次の御屏風に○家の集には八月駒迎と出源うけり

逢坂の関の清水に影見えて今やひくらん望月の駒　貫之

名所 関の小川 又関川といふ

金葉 音羽山紅葉ちるらし逢坂の関の小川に錦をりかく　俊頼

故事 関守神 新千載 誠て後拙抑ひたるあふ坂ハ関ちる神やゆるささるらん　さねき

今も上に蟬丸宮二座東西にあり此集後の御事ハ今に関守神といふ蟬丸と名付しハ名誉の琵琶なるべし此上下にあるものハ秀吉連歌の瑞書にも見へたり昔関所にして神祠を置て市に市姫の神橋に橋姫の神を祭るがことし東鑑第八に白川関の明神に奉幣とあるも関守神にして今も関戸明神とて所〻にあり

○小田原陣中に秀吉東武小条氏政を攻る時大津上の関の明神にて天下祈祷の連歌百韻ありて奉納を天正十八年六月十八日施主人浅野弾正少弼長政

連歌発句あり

はめくる名むもひよりけ清水かな　紹巳

ちげる山陰ろつく杉むら　清正

花ちらてはありし松風ハ吹さして　昌叱

霞かゝなひをあけゝる此そら

帰る一ツ枕のうへに夢を本つゝ

うけを枝にめくしき此月

故事

駒迎　駒牽むかし毎年八月十五日に諸国の御牧のむまを天子へ貢奉るとて逢坂の関を来る時左馬寮右馬寮の官人此所にむかへて

逢坂山

一名手向山

手向といふは往昔旅行人はかならず山の嶺にて絹或はいろいろの紙をぬさとして四方へちらし道祖神へ手向し之其手向は此山にかぎるにもあらね共都より出てまづさしかかる初嶺なれバ此所にかぎらず手向せし故に手向山の名あり

あり衣み岩を今タフゲといふ則たむけの轉語なり　契沖説
後撰集　恋四
名にしおはゞあふ坂山のさねかづら人にしられでくるよしもがな
あふさか山の歌数多あれども略す

武内宿祢忍熊王と逢坂山に戦ふ

是をもつて密に謀て曰今皇后皇子を懐て群臣悉く従ふ必ず幼主を帝に立て我に弱べし其兄を以て弟に従ふべきやと皇后の御船を播磨明石に迎へ淡路島に船を絙し毎人に兵を与て以て皇后を待て害せんとす皇后の船も紀の海にまうでく紀伊の水門に退き給ふ此時忍熊王又山城の菟道に到て是を待皇后武内宿禰にこれを討しむ宿禰菟治川の北に屯して三軍に令して悉く椎結しめ各儲の弦を髪の中に蔵し木刀を佩て既に皇后の命と誘て曰我何今天下を貪ん唯幼主を懐て君王に従ふべし願くハ共に弦を絶て兵を捨よ忍熊これに誘まそ兵を解て河の水に投ぐ武内此時に及ひて[illegible]をりけて蔵せし弦を出し河を渡つて兵を進む忍熊欺まつく戦ふ事を得ず兵を曳て稍く退く武内是を追て逢坂に遇て以破る故に其處を逢坂といふ云云

忍熊王逃く入べき所なく終に湖の水に投じて薨じ給ふ武内其の屍を探れ共得ざれバ歌て曰

あふみのみ瀬田のわたりに潜く鳥目にし見えねばいきどほろしも

淡海海　憤

名所

逢坂関旧跡

其始て置く所未詳日本紀略云延暦十三年桓武天皇廃近江国相坂関剗とハ見へたれ共日本孝徳大化二年関塞防人を置とあれバ若此時始めしにやと貝原氏もいへり。按に三関の名あり又都の四方に要しけるも又[illegible]中相坂を東国西国の行人征馬こゝをすぎざるハなく都近き所にして往来も多て賑ふき咽喉の

走井

築山

古流をて今のれ其形をうたせしと云ありし高木などる其余風もみえへうり築山の上に小亭あり是をむかけの亭といふ内に小野小町百歳の像とて筆籍ヶをおなる老婆の像あり石の間き所に小堂あり其薬師といふ石佛あり

大津
追分

此所東国より来る人宇治ふしみえ京への別道處なり追分といふ是より換名紙宿坂とも又大津よも入り札場の傍ら柳緑花紅の標石あり是に添へふる文六地蔵髭が辻とふ所の標題なくして文むかりありこの追分より大津領にて町つづきなり針算盤大津絵などの店多し

親王の御子是其人なり中 きのくにの山里の家にありなりて面白き所にてすまひつゝ 中略 あるとき こけをさきざき〳〵まことゐのさとに此ところをつけてありけり

後撰 あれにけりあはれいくよのやどなれやすみけん人のおとづれもせぬ　業平

なか〳〵くて世にふるよりは山科の宮の草木とならまし物を　三条右大臣

毘沙門堂御門跡△　奴茶屋△

諸羽明神△ 四宮明神とも云○祭神の額は宗慧の筆也 宗慧は光悦附の弟なり 四宮の氏神にして 末社あり 御旅所は小山村の氏神なりし諸羽の森のうちにあり

十禅寺 四宮村にあり 本尊聖観音は聖徳太子の御作にして明暦中明正上皇勅額を下したまひ今の堂も其時の建立なり△

廻地蔵堂△ 六角堂路傍にあり 俗に六地蔵といふ ○拾芥記第六 西光法師の建立なりし 四宮川 小幡里 西七条 蓮台野 深泥池 西坂本 六所の地蔵菩薩を造り卒塔婆の上に道場を構へ 大悪の者の極楽を願ふ為なり此地蔵と号すと云 此西光は法皇さくんの附 謀叛の心ありけれは其の罪 師高 師経 芸に誅せらる中納言信西が臣也○天文十八年九月廿九日山科郷より大石の六地蔵を供養せらるゝものにしてこれを中興せらるゝに似たり

四宮川 安祥寺村の四宮川原とも云 一名袖の川原 源は三井の山中より出て小関越より広き川原にして四宮を経て宮川原より川下を檀川といふ 四の宮のせは絶ず まつりして風ふかう 但し今は細く流るゝのみなり

小町家集 今朝よりはわが身の宮の秋風やそでにも何かしるしとならは

是は四の宮とかくしてよめり 小野小町も仁明帝和の崩御し給ひしより といへども 全く年月も経ぬればこの四宮体しませし所なるべし 是も山科のうちに

四宮村
四宮川
巡地蔵
やぶ入乃
あふミの
東
雲袷

君や
そで
くらべ

安祥寺

伊勢物語
むかし田村の帝と
申すみかどおはし
まししけり其時の女
御たかきこと申す
みまそかりけりそれ
失せ給ひて安祥寺
にてみわざしけり人々
ささげもの奉りけり
たてまつりあつめたる
もの千捧げばかりあ
りそこばくの
ささげものを木
の枝に付て堂
の前に立てたれ
ば山もさらに

堂の前にみ
動き出たる
中うよゑん
みえけり中略
かのことざと
題にて歌の心ばへ
ある歌奉らせ給ふ
右のむまのかみ
なりけるおきな
めはたがひなが
らよみける
山のみな
うつりてけふに
あふことは
春のわかれ
をとふと
なるべし
右田村帝ハ文徳天皇の御事
むまのかみハ業平のこと

新拾遺 山科の音羽の川のさよ千鳥夜ふかき声のこそ鳴　権中納言公雄

同 世人もなき松ちるに住みよかくなりしよりたれそれは山科の里　和泉式部

新後拾遺 旅人の袖をそ折る山科のこちそみれ里の秋みれ夕暮　家隆

霧こめて鶉鳴なる山科のいはたの森の秋の夕暮　頓阿

大てんのうくれごし今街道の山科より入ゐは山科の陵村なり

天智天皇御廟 道りを御廟野といふ街道より三町斗り左へ入る森に小祠ある居皆落し石の水鏡あり十二月三日帝御馬にのりて山科へおはして林の中へ入てかへらせ給ひねつゞくおはしまさぬよしその御沓の落たりし處を陵とさだめし 此説扶桑略記云天子の遺跡を取一隻とも

此御廟 又ハ是等の文字より見え誤りつる誤りなどせしなるべし日本紀にハまさしく天皇十年十二月近江の宮に崩じまさとあるより今陵丘もみえたるなれどもいづれ此邊のしれハあるべし天皇のはうむりハ大津の京より遠き陵ハ東西廿五丈南北十六間の立札あり

ハ日本十陵の第一にして年暮荷前の使あり延喜式諸陵寮近江大津宮御宇天智天皇在山城国宇治郡山科陵兆域東西十四町南北十四町陵戸六烟。

山城志云陵戸六ハ烟の内今ハ一家あるて嘉暦建武之乘の補任牒数多く荒廃あらりし又荷前の使もよへ延喜式中務省荷前使凡十二月奉諸陵幣其使三議已上及非参議三位大政官定之とこゝ幣とあり何にても供ずる物をのぞくり荷前とハいふなり

万葉集 天皇聖躬不豫時大后奉御歌一首

天の原ふりさけミれハ大王の御ミいのちハなかくてそれ足

天皇崩于時童謡曰

ミよしのゝよしのゝ鮎。鮎こそハ島辺もよき。あくるしへ水葱(なぎ)の下芹(せり)の下我(あ)くるしへ

鏡山(かゞミやま) 陵(ミさゝき)村の西にあり 又それよりの名を御廟(ごべう)にたてきる山なり

是より三丁程東に蓮如(れんによ)上人塚(つか)の標石あり 明王寺の後(うしろ)の山成

万葉集従山科御陵退散之時作歌 長歌

八すミしゝ我大君のかしこきや御陵つかふる山科のかゞミの山に夜るハも 晝 額田王

此哥によれバ御廟(ごべう)を鏡(かゞミ)山にありと見へたり

名所

御陵村(ミさゝき) 御陵川 藪(やぶ)の下村 皆山科の内なり 明王寺(ミやうわうじ) 御廟より又町にあり

安祥寺(あんじやうじ)△ 御廟(ごべう)の東にあり 元亨釈書に云、洛城(らくやう)東寺(とうじ)の実慧(じつゑ)上人の弟子恵運(ゑうん)と云 承和五年に家仁師と同じく入唐して同十四年に帰朝し 云 文徳実録(もんとくじつろく)斉衡三年十月紀朝臣真人我業為奥居捨以山城国宇治郡 再建(さいこん)せしと云 田山に旅入安祥寺になどのこりも見えたり 拾芥抄に安祥寺ハ五大虚空蔵大后明子によりあり明子ハ仁明帝の太后淳和帝の后也。伊勢物語に安祥寺にてミわざのありし事尚図上に記を

名所

了光山護国講寺(りやうくわうざんごこくかうじ) 日蓮宗山科(やましな)の標抹(ぢんまん)也△

山科宮(やましなのミや)人康(ひとやす)親王旧跡(きうせき) 宇(あざ)に御所の内と云 地名あるなり△ 仁明天皇第四の皇子也 世(よ)の人の住(とく)かくしませし故へ四宮川原の地名あり 歌に山科(やましな)の宮(ミや)とよめり

○三代実録貞観(ぢやうくわん)元年五月七日出家入道(しゆつけにうだう)すと云○伊勢物語に禅師(ぜんじ)の御子とのふあり

天智天皇廟陵
即御廟野といふ

日岡嶺（ひのとうげ）

續古今

ましろ鷹の
とくろ
末の原
狩くらし
入日の
岡に
きゞを
なく
なり

土御門院

我もまたこゆれ都に入日かけるまでくむかふあふ坂の山

松坂にも仕へぬ年〳〵の御参宮にこよはら此示しも千歳の松は名所なりけれハして
度毎の祝詞にあひぬるも称意の志かうしむる示なり

君が経千代の花さく松坂をいく十廻りか越てみるべき

名所 粟田山 六帖

ゆくさ山越るも越と知人ともなる旅逢坂へかけ出けり

名所 日岡嶺

此嶺の左りのかた鏡山なるゆゑにとうげの茶屋のむかふの山は東寺まいる其かどんらく朝日の出る所かはしてみえぬ山の名によべり 御道より南東へさして行所は木食上人の庵 ○義経手本松の古株あり△

附言 明智光秀の事日の墨石といふ所に細工して楽焼の明智光秀の首塚あり後一山伐のやぶれよのがれ去る秀吉堀尾吉晴に命じて是を退しめ終に大津においてく擒とし後に日の岡にさらし其首を刎る其死に臨で詩歌あり

主仇有前白刃空　殺身曝尸報君公
可憐晋國刺衣客　共感生涯一夢中

ここに紡露の命はみじかき旅の果をとも結をひの墨のこと

名所 山科

山科といふは都て八十七村あり其名所は ○山科川 ○山科野 ○音羽山 ひがし山清水寺にはあらず逢坂山の北のつらなり ○鏡山 先ぬきん同名あり ○花山 郷の名にあらず ○小栗栖 ○槙雄山 ○四宮川 ○石田野 郷名にあらず ○小幡 上同 共に名所にして山科の内也

古今 山科の音羽の瀧の音にのみ人の知るべく我恋めやも　不知読人

粟田口十禅師の辻の故事

著聞集云
一條院の御時御秘蔵の鶴ありけるがいく
とりはなちたりけれども尋て
求めえざりけれど
鷹が粟田口十
禅師の辻に繋
ぞそしも自ら
人の云ことを
聞すまして人を
付られけるなる
にひそかれ上下
み編笠着さ
るより人馬が
来りて此鶴をみて
云おかげ遊撫往来ぞ
取ぬるにとひてある

者あり納此人とかーして
鳥をうかはせけるに南殿の池
に魚集り浮ひあがる鵜
まゐりければ
あはせて大なる
鯉をとらへり
たまたま鳥も
至りけるを
帝其ありさまを
と問せたまへば答曰
此鵜は
ことごとく後の
鳥は先母のなる
にして後父の
藝を傳るものと
せば感ありて後漢
國に田園を賜せる
接挨をなしたり

又御茶といふ事あり是は今の黒谷への廣道（此廣道は昔の名井大路也）三条通の通を

十禅師の辻といひしならん

附言 義経記に金商吉次牛若殿奥州へ具したる時の文に「明日吉日にて候ふ程にとくの門出候へ」とひそかに申しければ粟田口十禅寺の前にて待まゐらせんぞとのたまひければと云 師の字を落したるは義経記の書損なるべし又著聞集に一条院の御とき蔵人十禅師の辻までとくありけり其ことかはり図上にあるなり○此二ヶ条ともに十禅師は粟田口なりされば十禅師の辻より御茶などいふことも旧し一基の社地にてありしを後に青蓮院経営のときに境内にこもらせまゐらせるなるべし

牛頭天王社 青蓮院の東にあり東陽坊忠尋勧請にして元弘乙未回禄の後足利義尹の産土なりとて明応九年卜部兼倶に命じ再び勧請ありて感神院新宮の額あり則粟田口の惣社也（例祭九月十五日 山城志云牛頭天皇三所、其一は粟田口園御に祭る处は吉田村にあり西天皇と称し聖護院村と云ふに祭る一つは岡崎村にあり東天皇と称す）

悪源太義平が忠臣十六騎の一人山内首藤刑部俊通が墓（三条通廣道なる町北東今此人家の脊戸にあり ○平治の合戦に義朝打まけ玉ひて東国へ落行んとせし時六条河原にて敵三騎を討とりて終に討れたり）

○佛光寺廟所△

阿弥陀堂 服檀親鸞上人植髪の尊像を安置す△

定法寺同地 堀地御坊と号す宣胤卿の記にも見へたり地名今存せり

鍛冶が池 良恩寺の傍に跡あり今は藪となれり ○鍛冶が井 青蓮院御境内大谷氏の藪の内にあり 今鍛の名に粟田口物といふ昔は鍛冶の上手多く住める所なり就中藤三大隅守久国藤四郎等は其名天下に聞ゆ後鳥羽院鍛工を好ませ給ひて院中に鍛冶ありしとき久国を師範に召さる是番鍛冶の始めなり鍛冶の系図に新御所といふは此院の御事にて御製の鍛には十七の菊を銘し給へり能狂言の粟田口は粟田口藤馬之悪る久国のことなり鍛冶が池井ともに小鍛冶宗近が古跡とするは誤なり

右大臣藤原実雅卿山荘旧跡 粟田村にあり 和名は続古今集に見えたり ○粟田口関白山荘旧跡 同所にあり 二条殿と号を拾遺集序の作者也 ○田村丸の別業 日本後紀に見えたり ○藤豊長亭 空花集に見えたり 粟田寺 三代実録に見えたり ○粟田口寺 山槐記に見えたり 共に粟田口の旧跡也

粟田宮旧跡 粟田院ともいふ粟田村の小名地名に円覚寺といふあり即これ清和離宮の旧地也 三代実録云元慶三年五月四日太上天皇清和院より遷りて粟田院に御を遂に其地に寺とし給ひ道場として額を円覚と書し給へり

粟田口天王祭
毎歳九月十五日昼夜二度の渡御あり神輿なし所の鉾を以て振廻す其余氏の町よりも鉾数多持連て洛中其飾いろ〳〵て美麗なり

昼ハ粟田
御殿より夜ハ
白川橋と試て
水際を智恩
院さうひの一ツ
橋へより此橋
の上にて箏の
曲指工妙を尽を
図の如し
夜寅の刻

白川橋

条小川に退くといふは此小川にて今古川町と呼ぶ其はあとなりその形のこりて溝の大なる流れあり今洛中洛外といふごとく古書には皆京白川とかけりされば加茂川より東は一面に白川なり但し流れより小なるをさして小白川といへり今の岡崎村悲田院二条新地のあたりもすべて小白川也

古跡あり略之

粟田口 此辺りの惣名にして東は上粟田下粟田といふ今町数三十ヶ町なり 粟田口は粟田山の口といふなり

青蓮院 京極大閤師実公の御子行玄大僧正開基也当院筆道の免許あり是を入木道といふ筆法は尊円親王を御祖として御代々書跡相続ひろく高逸におはしまし御書風を御家流と称す

門出蛭子神明社 旧地は聖護院の森の北にあり炎上の後三条通粟田領にうつし其後青蓮院御境内庚申堂の傍に移す其旧地を蛭子谷といふ今三条の旧地を今蛭子町といふ これ牛若丸奥州下向の門出に願を掛られし所とて号といひ伝ふ

金蔵寺 米地蔵。庚申堂。大師堂元三大師なり 辨財天。尊勝院 △山門の二院にして青蓮院の室なり当院代々江州多賀大社の別当兼帯

十禅師の神祠 青蓮院境内にあり百練抄には青蓮院勧学院にありと云 古書に十禅師の辻

大佛
清水
八さか
ゑびす
建仁ち
五条はし
四条の橋

三條橋（さんでうのはし）
ちおんゐん
ぎおん

斎宮群行
昔大神宮の御杖の代として内親王を斎宮に立せ給ふに三年の間内裏及び野宮に禊して都より伊勢に趣き給ふを斎宮群行といふ是其圖之あり此書の體に至といへども

尚本実は下の斎宮村の条に委曲に記せり

挂巻毛文尒恐山邊
乃五十師乃原爾内
日刺大宮人者兄地
與日月共萬代尒母我

諸羽明神
袖川原
走井
近江国滋賀郡
関清水
逢坂ゆふ法げ堂
関寺
大津里
打出浜
同精神故事
義仲塚
膳所惣門
膳所城 并矢橋舟

十禅寺
どうれ茶屋
両国寺
蝉丸祠
関小川
関大明神蝉丸
長安寺
八丁札の辻
四宮明神
うろこ川
芭蕉堂
天満宮
膳所の猿

巡地蔵
小関越
逢坂山
関守神
立国観音
牛の塔
小町庵
同祭礼引山
石場 并坂迎
同塚
八大龍王社
信膳の浜

四宮川
追分
逢坂関旧蹟
駒迎
関清水蝉丸宮
近松御坊
城跡
松本村蹴鞠社
義仲寺
との川馬場村別保
八大龍神社
粟津原 并合戦

兼平寺
八幡社
鳥井川御霊社
桜谷鶯瀧
源頼朝石塔
暦海屁掛石

田畠社
五百羅漢
芭蕉幻住庵旧跡
石山寺 並祖師法堂
同乳母亀谷石塔
悪源太義平塚

蜻蛉の池
守子川
はらての薬師
源氏の間 並紫式部家 七論
行履岡

兜塚
兼平塚
夢の浮橋
紫式部石塔
龍穴池

一 近江國建部明神の邉りより以東ハ古道にならびたる故に名所も故事もおほし杜撰記にしのびざる故に彌略せり

一 伊勢新名所といへるもの凡十箇所ばかりこれあり是ハ大中臣定忠の家の歌合せの書よりえじすれ

一 名ある石の名或ハ松の名などは其の兒戯なりといへども是ある俗にまでひろく出せり

一 文中に神社式内と記せしハ延喜式神名帳に載る古社古宮と知るべし

一 神書に五部の書などいへるハ古書とさだめけれども学者の説々區々として紛らはしきが故に多くハ是を引用せず

一 佛刹の縁記又ハ佛像の出現などは態と其元を怪しくせんが為なる多くハ漁人の網に引あげし等の類十に七八ハ除きて記さず

一 引書ハ古書の外ハ勢陽雑記。神都考。宮川夜話草。の類尚文中所々に附記あるが故に悉く挙るに不遑

伊勢參宮名所圖會卷之一

目録

とれこ乃ほしのすゑ

藤波二位季忠卿

二緑園主人書

凡例

一此書ハ一國一覽の物に倣ひ只京都より伊勢參宮の紀行を委曲せり行程の里數を記さずといへども脈絡ハ無用の地名なりとも連綿を紐し數等の色々を厭ひく文義の略せるもありとしるべし

一官道の外左右に見え渡る間道の名區ハ大抵一二里三里の程と限りて本文に連續しるし▲の標を以て分てり

一寺社并名所の古説等の迂怪奇僻なるも共に實否を糺して妄説に似たるこれを竊闕を紐し古書印版に載たる怪誕流俗の俗語或ハ佛説等ハ姑く從ひて図して一具に倚ふ物あり

一名所など昔に變し事どもハ稍等致をとくへども其言を盤し雖きものハ按ずるに士佛の參詣記又長明の記をもて照し合せて止めり士佛ハ足利義詮公の典藥にて國學の文人なり長明ハ順德院の時の人にて加茂宮の氏人法名を蓮胤といふ

一古道の名所を新道に混せしものハ図ハ今に從ひて其裡を文中に記を

をはくのへくさ
こらへかしぬよしと
せんすぬこそに端
にも紫とゆへよせ
こぬかしいなすこそ

えわしうつ清はとて
こしかよみてよ稚
まかぬよりいつしから
さけるをの
寛政ミのとのとし乃

せぬことはいたしくみゆ
いふけり阿らはし字お
さは見てもろか
あきまるに津もりつ人
先はつきいふてる

そめいとひさ
ますてにの字代
ちよとひすれりを
やあ中旅乃川ぬか、
まるつは津代はゐもし

伊勢參宮名所圖會　一